

■各所へ協力依頼

虫追い祭開催の決定を受け、田中嘉津美課長は高山昌則組合長に報告、「あんな大変な虫追いをホントにできるのか」と驚く組合長を説き諭す。田中課長は次に、田主丸町教育委員会の瓦林利光教育長と田主丸町の渡辺定和町長のもとを訪れて協力を依頼しました。いずれも、若者による伝統芸能復活の意義に賛同、資金援助してくれることになりました。

挨拶回りで会った自治会長達も皆、大いに喜んでくれました。案内状には「農協青壮年部とパイオニアクラブが本町の文化財であります虫追祭を十三年ぶりに復活させ、今後技術を保存したいと思えます」と書かれ、その熱い思いが地元へ伝わったのです。

■昔を知る強力な助っ人

人形作りと人形踊りの指導者を確保することも、急いで進められました。

実は、田中嘉津美課長は田主丸町中心部に住み、子ども時分の太鼓打ちから虫追いに参加、大人になると手塚人形の右手を担当しました。だから昔の虫追い経験がある人達を知っていました。

▼人形作り指導者(昭和52年)④



北川理事は、鐘太鼓も指導しました。一方、人形作りは、大馬が出ていた町中心部の方に指導をお願いしました。『虫追い祭覚書』の人形作りの指導者は、次の4名です。

馬田始(当時80才・村島地区)、荒木正吉(71・村島)、上野虎太(71・馬場)、石橋亨二(67・栄町三丁目)。

指導者になった時、馬田さんや荒木さんは13年振りの虫追い復活に「生き生きするうちに人形が作れて嬉しかあ」と大いに感激されたといいます。

地元の熱心な協力と多数の経験者

に参加、大人になると手塚人形の右手を担当しました。だから昔の虫追い経験がある人達を知っていました。

そんな田中課長が協力をお願いしたのが、農協の北川勝美理事でした。北川理事は美しい人形踊りで有名だった豊城地域の怒田地区の方です。北川理事は「復活を待ちつつあった。持つてくる技を全部教えやる」と喜んで応じました。

北川理事は、怒田・中舎館・口高の豊城地域から指導者を呼び集めました。昭和52年の役割分担を示した『虫追い祭覚書』によれば、人形踊りの指導者になったのは、次の10名です。

北川勝美(当時53才・怒田地区)、井上義敏(52・怒田)、林田寛(49・怒田)、富安豊(50・口高)、林田安隆(47・怒田)、林田政利(43・怒田)、松本康光(38・中舎館)、林田勲(43・怒田)、林田啓二(47・中舎館)、佐藤義一(47・中舎館)。

馬田始(当時80才・村島地区)、荒木正吉(71・村島)、上野虎太(71・馬場)、石橋亨二(67・栄町三丁目)。

指導者になった時、馬田さんや荒木さんは13年振りの虫追い復活に「生き生きするうちに人形が作れて嬉しかあ」と大いに感激されたといいます。

地元の熱心な協力と多数の経験者

の指導が得られたのは、虫追いが中断してまだ13年しか経っていなかったからです。これが10年後だったら全く違っていたはずで、まさにベストタイミングでの虫追い復活でした。

▼鳥越美智夫さん(右)(昭和52年)⑤



■開催9日前人形作り開始

人形や馬の製作、それと練習も急ピッチで進められました。

人形作りですが、まず田中課長とパイオニア池尻吉和副会長が取って来た芯棒用の竹を指導者に見てもらった上で、再び10月13日、青壮年部の清水良則支部長や農協の鳥越美智夫さんと共に5名で竹を伐りに耳納連山に入りました。

翌日14日から指導者の方を中心に、青壮年部が手伝う形で人形の骨格を作っていました。鳥越美智夫さんは、顔となる面や、

▼手塚(昭和52年)⑥



肩や腰の鎧部分、陣羽織などを器用に作って飾り付けました。

見た目で、当時の人形には大きな特徴がありました。1つは、両人形とも棕櫚(しゅろ)で出来た髪とヒゲをふさふさと生やしている点です。72歳の実盛は白い口ヒゲとあごヒゲを長く伸ばし、髪は両者とも背中の中ほどまでの長髪です。

2つめの特徴は、トタン板を巻いた芯棒をそのまま胴体とするため、かなり細身な点です。現在は剣道防具の「胴」を芯棒に付けています。

人形作りは正味5日間、10月20日に最終的に仕上げられました。開催2日前です。

なお、青壮年部は、馬作りの手伝いにも参加、20日は60〜100本の松明(たいまつ)も作り、開催前日の21日は吉井警察署(現うきは警察署)に道路使用許可を申請するなどしています。

▼実盛(昭和52年)⑦



■開催10日前人形踊りの練習

人形踊りの練習は、人形の最終仕上げを待っている間は到底間に合いません。材料の竹を取りに行く前日の12日から、農協前の広場でパイオニアクラブは練習を始めました。人形が無いので、何も持たずに動作を練習したのでした。

早朝6時から7時過ぎまでの練習に参加したのは、12〜13日が各30名、15〜16日と18〜19日は各40名、20〜21日は各50名が参加しました。恐らく16日、早ければ15日から人形を使った練習が始まったと思われます。

当時パイオニア会長だった池尻和守さんは「どうやって踊るのか、そればかり気になった。全員が一生懸命に練習した。でも人形はそれしかなかったから、本気でぶつかれたかった」と語ります。使い古しの人形で練習できる現在では想像できない苦勞です。

人形を高く上げる時、人形の手がだらんと曲がっていると、指導者から「引っ張らんか!」と怒鳴られました。平成22(2010)年第12回虫追い祭りのパイオニア会長・二又朋則さんによれば、手で胴体を引き上げてやる必要があるそうです。そうすれば、手もピンと伸びて美しく見えるのです。

踊りに欠かせぬ鐘太鼓ですが、鐘は町内3つの寺から借りてきました。練習の様子は、10月21日の西日本新聞に写真入りで紹介されました。

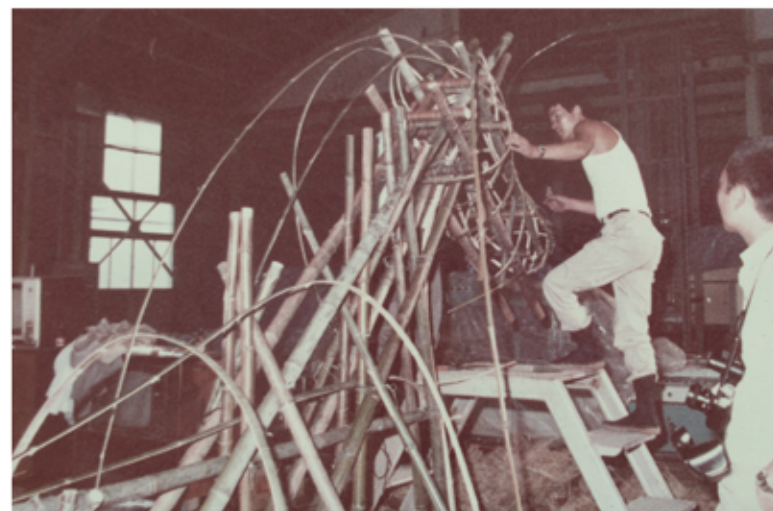
▼池尻和守さん(左)⑨



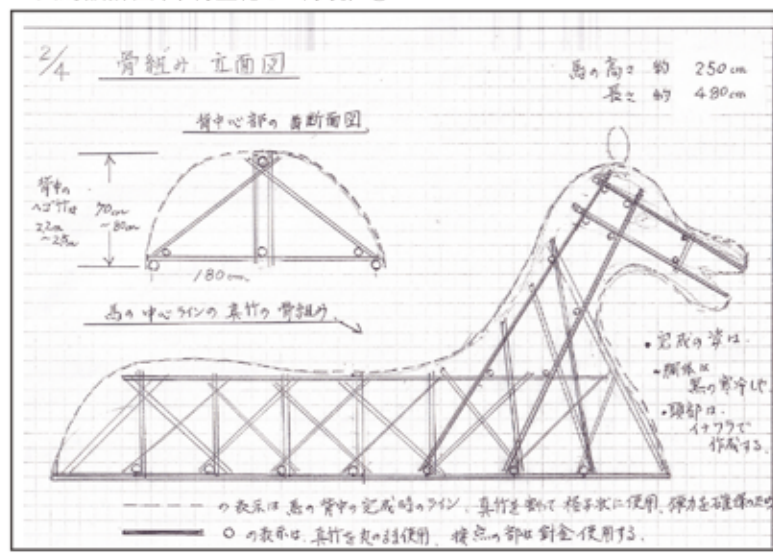
▼大馬の製作現場(3枚とも昭和52年)⑧



▼今村重徳さん(上)⑩



▼大馬設計図(今村重徳さん再現)⑪



この時に作られた大馬は、その後45年間使われ続けています。どうやって作られたのでしょうか。

10月6日に8ミリフィルムを見て「馬を作る」と言い出したパイオニア今村重徳副会長が中心になって馬作りは進められました。

実際の製作に入る前に、今村副会長は大馬の寸法や竹の組み方の設計図と完成予想図を作成し、それをもって農協の田中嘉津美課長に馬作りの許可をお願いしました。図面という具体的な提案もあって、田中課長もすぐに同意しました。

今村副会長は、馬の設計図をゼロから起

こしました。虫追い講義をした行徳平八さんが過去の寸法図を持っていたものの、そこには内部の骨組みなど必要な情報が不足していました。

今村副会長にとって参考になったのは、田主丸天満宮に捨て置かれたおそく昭和39年の馬の残骸で、馬の頭部を2つ合わせて作る片方の竹組みでした。今村副会長はその大きさに驚いて、限られた時間では半分の大きさでないと間に合わない、と考えて、そこから馬全体の大きさを想定したのでした。

虫追い復活がもっと遅ければ、この馬の残骸も無かったでしょう。そうなっていたら馬の製作も不可能だったかもしれません。